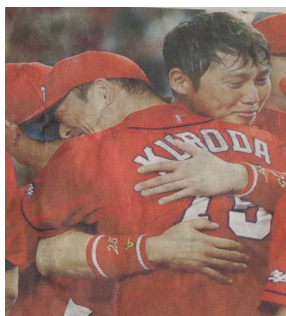


コラム54:2016 カープの話 (2016年10月)

あれから何度も蘇ってくるシーンがあります。2016年9月10日夜9時41分東京ドーム、広島カープのリーグ優勝の瞬間です。

中崎投手が投げ、田中遊撃手を取り、新井に投げる。＜優勝！＞選手が一斉にベンチから飛び出す。赤いユニフォームの乱舞の渦の真ん中で、二人の大男が号泣し、シッカリと抱き合っている。選手たちが二人を囲み、緒方監督が「オイ、オイ、お前ら何やとるんジャ！」と言ってるような顔つき。彼もまた心の中で号泣している。やがて選手たちが監督を抱え上げ歓喜の胴上げ、次は黒田投手、泣き顔を帽子で必死に隠して宙に舞う。新井選手が逃げています！「オレはイイから、イイから！」それでも選手たちは許さない。彼は泣きしつ、宙に舞う……



(9月13日中国新聞より)

いやあ、本当にいい場面でしたね。優勝が決まった時の「歓喜の胴上げ」というのは、今まで幾度となく(他球団で)見せられてきました。しかし、胴上げの前に二人の大男が「涙の抱擁」をするというのは前代未聞。優勝して、こんな場面を見る事は、もうないでしょうね。この「男の涙」の意味、それをカープファンは皆、よくわかっているのですよ。投手と野手、移籍した球団の違いはあっても、二人には沢山の共通するものがあります。

二人とも特別に注目されて入団した選手ではありませんでした(黒田はドラフト2位、新井は6位)。共に、すぐに目立った活躍をした選手ではなく、カープの厳しい練習に耐えて、一流といわれる選手に育つまでに4-5年の年月を要したのです。二人は、同じ年にカープを離れ('08)大リーグ「ドジャース」と「阪神」という違いはあるものの、ともに7年間の他球団での選手生活をおくり、奇しくも時を同じくして、昨年('15)カープにカムバック。二人の男が闘ってきたそれぞれの人生の軌跡。古巣にカムバックして、「カープを優勝させたい」という2年間の熱い想い(男気)。そんなことを十分にわかっているからこそ、カープファンは共に熱い涙を流し、勝利の喜びに酔えるのですよ。「広島人でよかった！」「カープでよかった！」とつくづく思いますね。



カミサンが4年前に他界した義父の遺品を整理していると、古い机の引き出しから意外なものを見つけ、持って帰ってくれました。「面白い物が出てきたんよ。コレ骨董品の価値がないかねえ」見るとB-5サイズの古ぼけた証書が3枚ーそれは「カープの株券」だったのですよ。「金式百圓」(200円)と額面が表記され、その上に「CARP 株式会社 広島野球倶楽部株券」と横書きで記してあります。日付は昭和25年('50)10月30日となっていますから、まさに

カープが誕生した年に発行しています。ちなみに、この年の成績は41勝96敗で勝率.299順位は8位(当時セリーグは8球団)、という記録が残っています。数字をただで、かなりの苦戦状態であったことが想像できます。

資金もない、選手も寄せ集めの「ビンボー球団」であったゆえに、このシーズン終了後、カープの身売り(合併)、解散騒動が起きており、その時に株券が発行されています。この時に苦しい経済状態を知ってカンパをしてくれた人に、球団が領収書代わりに発行したようです。配当など当てにできない株券の発行、そして義父を含めた購入した人も見返りなど期待しないで買っていったのでしょう。有名な「たる募金」が始まったのは、昭和26年('51)3月となっていますから、これはその前年の話ですね。

いろいろと逸話が残っています。移動は夜行の三等列車で雑魚寝状態。宿は知人宅でお世話になって、給料の遅配は日常的で選手は生活できず、球団は家賃不払いで宿舎を追い出され…などという悲惨な「苦労話」が沢山あるようです。カープは12球団で唯一、親会社を持たず、独立採算で経営をしている「市民球団」です。それゆえ、ズーと「貧乏球団」でしだし、戦力補強も思うに任せず、資金も乏しいので、何度も存続の危機がありました。この株券は、創設当時の特に厳しい時代を象徴しているもの、と言えるかもしれません。調べてみると、その当時の内野席入場券は180円、それから大まかに計算すると、この3枚の株券の現在の貨幣価格では1万円位になるのではないかと推察しました。オトウサンは自分のナケナシの小遣いを削って、カープに寄付したのでしょう。骨董的な価値などないかもしれませんが、大事に保管しておきたいと思いますね。

<こころで小休止>

オッサンも応援！



子供たちも応援！



ワンちゃんも応援！



家族そろって応援！



<みんな カープが好きなんよ！>

プロ野球選手について、私は「ある出来事」を思い出します。時代は、今から約40年前、1970年代終わり頃で、私が花市場に入社して3年くらいの頃です。場所は広島市の己斐駅(現西広島駅)の前にあった「江戸天」という小さな食堂、老夫婦が二人だけでやっておられましたね。市場から歩いて10分程度の距離にあって、そこは「カレーうどん」が店の名物でした。ウマくて、安くて、早かったのです。「ウマイ」については人により異論がある所でしたが、とにかくクセになる味でした。

その日、私は入社してまもないNクンと一緒に来ていました。注文をすませて待っていると、入り口のガラス戸を開ける音。鴨居にヒョイと頭をくぐらせて、ひときわ背の高い男が入ってきました。ガッシリとした体格の若い男は、隣のテーブルに腰をおろします。すると、いきなりNクンが声をかけたのです。「どうしたん？久しぶりじゃね。元気にやっとなん？」一瞬の戸惑いの後、彼は少し自嘲気味に、「全然、ダメじゃわ。コレよの」そう言って、彼は手形で自分の首を切る素振りをしました。「これから職探しじゃわい」「ほんまに！大変じゃねえ」—どうやら同級生同志のようでした。

あとで聞いた話では、彼はNクンと同じ高校のクラスメート。野球部と柔道部という違いはあったものの、同じ運動部でよく話をする間柄だったようです。「高校のときはピッチャーで四番、凄かったんよ」彼の出身校は野球の名門校ではなく、地元の公立高校ですが、あの「カープの山本浩二」の出身校として有名でした。「高校からプロにスカウトされてね。ドラフト四位じゃったかな。中日に入ったんよ。ガンバっとなる思うとったんじゃけど、プロでは通用せんかったんじゃろうね」「あがいな大きい体をしとってもダメなんかのう」「人のいい、気の弱いところがあつたけえね。プロ向きじゃあなかったんじゃろうね」人並み外れた体格と、身体能力を持って生まれたゆえの「不幸」、というんでしょうかね。食事を終え、再び長身を折るようにして暖簾の向こうへ去って行った彼が、その後どんな人生を歩んだのか(あるいは歩んでいるのか)、そのことをNクンに聞いたことはありません。

今年の広島カープの躍進の原動力は「黒田と新井」の存在が大きかったというのは、誰もが認めるところです。しかし、もう一つの要因として「球場」をあげる人もいますね。球場が人を集め、沢山のファンの声援が選手を後押しした、というわけです。この球場は本場アメリカの大リーグの球場を真似て造られています、マイナーリーグを含めた地方の小さな都市の球場を参考にしていることが、スゴイのですよ。むりやり沢山の客を入れて満員にしようという考えではなく、球場に来た老若男女、いろんな人が楽しんで帰ってくれることに主眼がおかれているのです。



まずは色んなスタイルの観戦席があります。私も一度だけ「ファミリー席」で、子供たちの家族とともに野球観戦をしたことがあります。ゆったりと余裕のあるスペースで、皆で持ち込みのピザを食べながら、楽しい時間を過ごしましたよ。残念ながら「負け試合」でしたが、勝敗に関係なく「いい思い出」が出来ました。毎年友人K氏の招待でパーティーデッキ席に行きますが、雨除け屋根のある、申し訳ない位の、広々としたフロアーですよ。そこで、大勢で雑談をしつつ、生ビールを飲みつつ、ツマミを食べつつ、実に贅沢な気分で観戦できるのです。他に、「砂かぶり席」「寝そべり席」などいろいろあるようですし、コンコースに出ると、飲食店やグッズ店だけでなく、子供たちの遊べる空間も用意されています。さらに今年になってから、入場口そばに「お化け屋敷」まで(!)。こうなると、ここはボールパーク(野球場)というより、「テーマパーク」(遊園地)ですね。

ここまで書いた上で言いにくいのですが、実を言うと私は、「熱心なカープファン」ではありません。少なくとも「真面目なカープファン」ではありません。今年、球場に行ったのは、わずか1回、それも友人の招待してくれたパーティーデッキ席のみ。大きなことを言える立場ではないのですよ。ついでながら、野球のプレイの方もヘタクソ、全くダメでした。夏場の「お楽しみ」は、RCCラジオ(中国放送)のカープ中継。夕方涼しくなってから仕事をしますからね。なにしろカープの全試合をラジオ生中継するという「有難い放送局」ですから、ずいぶんとお世話になりました。ただし、仕事を終えると、それからは聞きませんし、TVの野球中継を見る事はあまりありません。最近は、カープの試合のTV中継はあまりないですしね。

もう一つの「お楽しみ」は、翌日の新聞のカープ記事。地元紙の中国新聞は一面の「今日の紙面」という見出し(目次)に、勝った時は必ず、「カープ連勝」などという形で、必ず載せてくれるという「有難い新聞」です。そこを一目見れば、ラジオを切った後の勝敗の行方が、新聞の中を開かなくても、すぐに試合結果が分かるんですよ。負けた時には決して載りませんからね。今年は、私が腹をたててラジオを途中できったような試合でも、翌日の新聞を見ると、「オイ、オイ、逆転しとるで！」といったことがよくありました。そんな時は何べんも試合記事を読み返し、大事な試合は切抜きしてファイルしていくのですよ。

特に「カープはスゴイ！」と思ったのは、8月7日の巨人戦。連敗中だっただけに、この試合もラジオで途中まで聞いて、「今日もダメかのう」と諦めていましたよ。翌日の新聞を見ると、逆転に次ぐ逆転のもの凄いシーソーゲーム。6-7の九回2死から菊池の同点ソロ。そして最後は、新井の二塁打で逆転サヨナラ勝ち、勝利のガッツポーズ！……新聞記事を見ても十分に感動するくらいですから、「こんな試合を見たら、ファンはタマランじゃろうのう」と思いましたね。ハラハラ、ドキドキで球場の大勢の歓声の中で見るからこそ、興奮と喜びが大きくなるのでしょう。7連勝中の巨人はこの試合の後、力尽きたように失速。カープは再び元気を取り戻して優勝へ邁進。今シーズンの岐路となった試合でした。しかし、野球は「筋書き」があらかじめ用意されていないゆえ、時に「残酷な結末のドラマ」にもなります。そのことをイヤというほど思い知らされたのが、今回の日本シリーズでした。

一、二戦は地元でカープらしい勝ち方で連勝。＜この勢いなら一気に決めてしまうかのう。広島で優勝が見れんのはサエンのう＞という感じ。札幌に乗り込んでの第三戦、黒田耐えて6回まで投げても、延長10回抑えの大瀬良が大谷に打たれて、4-3のサヨナラ負け。＜たまには負けることもあるわい。最後までよう粘っとるわい＞という感じ。第四戦、新人岡田力投するも、打線が拙攻。ジャクソンが8回に2ランを打たれ、最終回2死満塁に丸が凡退して3-1の連敗。＜カープ本気でやっとるんかい。どうしても広島で決めたいらしいのう＞という感じ。第五戦、ジョンソン好投するも、9回押さえの中崎がサヨナラ満塁弾浴びて5-1の敗北。＜何やっとるんかい！もう後がないじゃないかい！性根を入れてヤランカイ！＞

そして、広島に帰っての第六戦。＜カープは地元では強いけえな。なんせスゴイ応援と天然芝という味方があるからのう＞ 野村、ヘーゲンズ、今村と繋いで4-4で迎えた8回はセットアッパーのジャクソン。二死のあとに3連打で満塁、4番の中田に押し出しで勝ち越され、次の投手にも打たれて2点差に。＜オイオイ、コイツ何やっとんじゃ！ええ加減交代したらんかい！＞次の打者は第四戦でやられたパの本塁打王レアード登場、＜イヤな感じじゃな＞と思ったら、打球はグングン伸びて満塁ホームラン！……終わりましたよ。見事なまでの敗北、連勝の後の4連敗、それも連日の満塁ホームランでのKO劇。カープファンにとっては「無残な敗北」という結末で、日本シリーズは幕を閉じました。その場でTVをぶち切って床に就いたもの、「眠れぬ夜」とまではいかないですが、寝つきがヒドク悪かったですよ。いつもはスグに眠ってしまうんですがねえ。

2-3 日経って、平静を取り戻した頃、二人のカープファンの「LINE 友」に、文と画像を送りました。

「赤き葉も 夢も散りゆく 秋の暮れ」

<残念！それにしても見事な敗北だったな>

<何か感想ある？>



一人目は Y クン 30 代 既婚 子供二人 職業 理学療法士

彼は<コラム 34:延長戦>にも登場していますが、小中高大学と野球をしていた「カープファン」というより、かなりマニアックな「野球ファン」。娘を連れてカープ二軍の試合を見に行ったり、選手のサインもかなり持っているようすな。

<采配ミスの連発やから、負けるべくして負けたな。

選手のせいじゃなくて監督と首脳陣のミスやわ>

<第三戦の松山が、レフトフライを後ろにそらしたプレーで、日本ハムに流れがいったわ>

第三戦 2-1 カープの 1 点リードで迎えた 8 回。2 死 2 塁で投手ジャクソンは大谷を敬遠、4 番中田と勝負するも 2 点二塁打を打たれて逆転された、という場面のことです。これは松山のエラーとは記録されなかったですが、決して取れない球ではなかった、と彼は見たのでしょう。1-2 戦で活躍したものの、守備に問題のある松山に代えて、どうしてあの時、赤松を使って「守備固め」をしなかったのか。これは選手の責任というより、ベンチの采配ミスではないのか、と彼は言っているでしょう。

二人目はユカリンさん(仮名) 20 代 既婚 職業 会社員

「今年は 15 回球場に行きました」という、熱狂的なカープファン。スクワット応援も辞さない「ホンマモンのカープ女子」です。

「今年は最後まで楽しめたシーズンだったので良かったと思いますよ！」

「勝負に負けたのは残念、以降につながる良い日本シリーズでしたね」

そして、最後にこう添えられていました。

「7 戦目のチケットを持っていたので、黒田の最後の投球が見れなかったのが心残りです」

私は日本ハムとの違いは、戦力というより、「勢い」(いきおい)の差だったと思いますね。なんせ最後までソフトバンクとの熾烈な戦いを制して、リーグ優勝、CS を勝ち上がってきたチームですからね。カープの場合は、追ってくるチームがなかったですから、何の足踏みもなく、楽勝で日本シリーズまで来れたんですよ。公式戦と同じ戦い方をしてしまったことが、敗因のような気がします。独走を許した巨人がイケンのですよ。もう少しガンバって、最後まで食らいつてくれば、カープの日本シリーズも、違った「雰囲気」になったはずですよ。

第七戦のチケットねえ。やっぱりそうですか。苦勞して手に入れたんでしょうにね。特に黒田は引退発表をしていましたからね。「日本一になって、黒田引退の<最高の花道>を見たい」というのは、「かなわぬ夢」になりましたな。

私は 2 年前の<コラム 38:65 歳 新春雑感>で、「スゴイ男が広島に帰って……」として黒田投手のカープ復帰について書いています。あれから 2 年、彼の夢は実現しました。自ら先発して決めたリーグ優勝、日米通算 200 勝、そして今シーズン最後の試合に勝って 7 年連続二桁勝利。

黒田選手本人が、引退に当たって、「最高に幸福な野球人生だった」と述べていますし、彼の「男気」は十分達成されたのではないですか。彼が「幸福な野球人生」を送れたのは、必死で「生き残る」ための努力をしてきたことが80%。そして、残りの20%位が、「選手を育てるカープ」に入った「幸運」だと思うんですよ。それゆえ彼は「恩義」を感じ、大リーグの「20億円オファー」を振って、「残された球は多くない。最後の一球はカープで」と言って戻ってきたのです。

「一球の重み」という黒田が、最後の一球を投じたのは、図らずもあの「大谷翔平」。それも彼を左飛に打ち取って2死とした後で、両脚の異常を訴えて自ら降板という形。間違いなくこれからの球界の主軸になり、大リーグを目指すであろう22歳の「若武者」が、大リーグから帰ってきた41歳、満身創痍の黒田の最後の打者になったことは、不思議な因縁です。彼は決して大谷のように、高校の時から注目された選手ではありません。強豪の上宮高校出身とはいえ三年間補欠としてすごした選手なのです。彼は引退後の手記で「野球をしていて楽しいと思ったことは一度もなかった」と書いていましたが、プロ野球の世界で一流であることを維持してゆくのは、大変なことだと感じます。プロスポーツというのは、強い者だけが生き残れる「弱肉強食」の、「バトルの世界」であると言えます。逆に言えば、私達の多くは、そのような厳しい世界で生き残っていく能力も体力も精神力もないからこそ、自分の人生を賭けて必死でやっている彼らのプレイに憧れるのです。そして、「スポーツの世界」に、日常生活では経験することのない、歓喜と涙の「一瞬の輝き」を見つめるのでしょう。

私が少年期(7歳～10歳頃)のカープというのは、順位は5位が定位置で、時に最下位。勝率は3～4割位ですから、ホンマに弱かったですね。当時のカープファンに聞くと、「あの頃はカープは負けるのが当たり前なんじゃけえ、タマに勝つとウレシカッタよの」といった返事が返ってきます。あの頃を思えば、今年のカープはスゴイですよ。89勝52敗 勝率.631 なんせ二位巨人に17.5ゲーム差をつけて、ブッチギリの優勝ですから。私のような「にわかカープファン」でも、ウレシカッタくらいですから。今まで辛抱して長年応援してきた「ホンマモンのカープファン」にとっては、沢山の「いい夢」を見せてくれて、まさに「最高デース！」の年であったと思いますね。それにしても、「黒田博樹」……ホンマに、エエ男だったですねえ。いつかまた、カープのユニフォームを着た彼に会いたいものです。

「チームの創設から25年で初優勝。’91年の最後の優勝から又しても25年。次の優勝には25年もかかっちゃあいけんで！ワシは生きとる自信ないけえのう」

<イチゴ栽培報告>

9月15日、イチゴ苗の定植開始。6年目となる今年のイチゴ栽培が始まりました。定植法を変え、肥料を押さえるなどの新しい試みの他、灯油ボイラーも設置しました。あれから二カ月、苗は順調に成長して大きく繁茂し、白い花を付け、ミツバチが飛び交い、早くも今年初めての大きな果実ができました。11月5日のカープの優勝パレード、行きたかったですが、あいにく月一の勉強会と重なり断念。やっぱり私には「赤ヘルカープ」より「赤いイチゴ」なのですよ。

